

JICA 中国事務所ニュース 8月号

目次

【最近のトピックス】

◎ みんなで達成！

～協力隊野球隊員の指導する野球少年が日本へ遠征～1

◎ 取達専門家が遠率友誼賞を受賞！2

【ニュース】

■ ワクチン予防可能感染症プロジェクトが四川大地震被災地を支援3

■ 円借款環境プロジェクト評価セミナーに参加3

■ 「鳥の巣」で活躍しているJDS 帰国留学生4

■ 2008年10月のJICA-JBIC 統合に向けて5

【人の動き・主要行事】5

【寄稿コーナー】6

最近のトピックス

◎ みんなで達成！

～協力隊野球隊員の指導する野球少年が 日本へ遠征～

7月20日～27日までの8日間、私が指導する河南省新郷市体育運動学校野球隊のコーチ1名、選手(中学生と高校生)13名が姉妹都市の大阪府柏原市へ遠征を行ないました。彼らにとって、飛行機に乗ること、海を見ること、初めての経験でしたので、日本滞在期間はすべてにおいて興味津々でした。



日中野球少年が大集合

新郷の子供達は、柏原市のボーイズリーグの子供達と何試合かの野球の試合を行いました。結果は惨敗でしたが、最初のうち緊張し、表情が硬かった選手達も、日本の子供達と試合をするたび緊張がほぐれ楽しく野球をしていました。水族館、プロ野球観戦なども行きましたが、どの場所に行っても、興奮した様子で、目を輝かかせていました。子供達自身やはり何か感じる事がたくさんあったようで、見終わった後は日記をつけたり、自分で選手の分析をしたりしている子もいました。

一番嬉しかったのは、日中子供達同士の交流です。言葉の問題を心配していましたが、私が心配している以上に子供達同士で知っている単語を使って必死に、でも楽しく交流していました。たった数日間の交流でしたが、別れのときお互い涙を流している子もいました。子供達同士では何の先入観もなく、言葉もあまり気にせず、交流しているのがとても

印象的でお互いにとって今回の大きな収穫だったと思います。

日程は、休憩時間もないぐらい内容の詰まったものでしたので、日がたつにつれ、子供達の疲労感が目に見て分かりました。ただ一人として、怪我なく、病気なく終えることができたのも、柏原市の方々はじめ、中国JICAボランティアOB・OG等たくさんの人の支援があったからこそと思います。今後願うことは、このような市民同士での交流の持続。子供達にはこの経験を通し、相互理解、また個人で何か「気づき」があったと思いますので、これらのこと活かし、これからの野球に対する考え方、取り組み、将来的に何らかの形で野球、または日中関係のことに関わってもらえたらと思っています。



正正堂堂とプレーしよう！

(河南省新郷市体育運動学校/青年海外協力隊員(野球) 岩永清邦)

◎ 取違専門家が遼寧友誼賞を受賞

「安全生産」プロジェクトの取違正人(とりちがい まさと)専門家がこのほど、遼寧省の産業の発展に貢献のあった外国人専門家に贈られる賞である遼寧友誼賞を受賞しました。表彰式は7月22日、遼寧省人民会堂で行われ、陳政高省長より表彰状と記念メダルが手渡されました。取違正人専門家は昨年2月から本溪市の企業で無事故を目指す「ゼロ災運動」を指導しており、企業の安全生産活動に多大な貢献があったと認められ、受賞の運びとなりました。ご本人からの感想をご紹介します。(中国安全生産科学技術能力強化

計画プロジェクト チーフアドバイザー 恒川謙司)

～遼寧友誼賞を受賞して～



陳政高遼寧省長から表彰を受けた取違正人専門家(右)

2008年遼寧友誼賞受賞の報を受け、プロジェクト活動の一環として取り組んできました「働く人の立場に立ち、一切の労働災害を許さず、ゼロ災害、ゼロ疾病を究極の目標に、全員参加の先取り安全衛生を推進することで、人間中心の健康で快適な職場づくり、明るく生き生きとした企業風土づくりを目指す実践活動」としてのゼロ災害全員参加運動推進が中国でも認められたと考え、ありがたくお受けしました。

しかし、忘れてならないのは、私の活動を支えてくれている安全生産プロジェクトの中国側、日本側のゼロ災運動の同志であり、私はプロジェクトが受賞したものと考えています。

式典の前日まで本溪市の企業を対象にゼロ災研修会を実施していました。会場には「以人為本 干群一心 群策群力 共謀公司友展大計」のスローガンが掲示されていました。中国語は話せないですが、そこは漢字の国同士、それなりに意味は汲み取れ、思わず参加者に「指差し唱和」を求めました。なぜなら、これは「一人ひとりカケガエノナイひと」を運動の原点(理念)にし、「トップの経営姿勢」、「安全衛生管理のライン化の徹底」、「職場自主活動の活発化」の3つの柱が関連し合い、支え合って事業の発展を目指すゼロ

災運動と相通ずると受け止めたからです。

私は中国でも、ゼロ災害全員参加運動が目指すものを、安全衛生という狭い所に押し込めず、先取り参加の活力ある職場風土づくりとして推進しています。つまり人間尊重を、生産・品質・コスト低減・4S(整理、整頓、清潔、清掃)などに取り組む企業活動のベースと捉え、企業体質を変革する運動として取り組んでいます。

運動は、そこに本気で運動をする者がいて初めて成り立ちます。ゼロ災への強い志を燃やす仲間は、まさに同志です。この運動を中国の企業に真に役立つ生き生きとした活動とするためには、同志とともに運動を創るという基本路線を進まねばならないです。安全一人

間尊重—ゼロ災こそ、経営の基盤であり、活力ある企業体質、先取りの職場風土づくりの出発点でもあり、ゼロ災の推進・定着に取り組みたいと決意を新たにしたところです。「ゼロ災でいこう ヨシ！」

(JICA 短期専門家 (中央労働災害防止協会) 取違正人)

ニュース

■ ワクチン予防可能感染症プロジェクトが 四川大地震被災地を支援



甘肃省陇南市で開催された拡大免疫セミナー開講式

5月12日の四川省大地震発生後、本プロジェクトでは、パイロット地区がある四川省北部および甘肅省南部で甚大な被害を蒙りましたが、また、四川省では、各地区に輸送されたワクチンを保存し、供給するシステムであるコールドチェーンが末端の郷鎮・村を中心に破壊され、寸断されたため、山間部を抱え、被害の大きかった広元市の青川県、綿陽市の北川県、安県などを中心に、冷蔵庫40台の整備を支援しました。今後もプロジェクト活動を通じて、家屋の倒壊などで紛失、消

滅したワクチン接種証作成への協力やパイロット地区で不足が予想される実験室への消耗品等のサポートを順次行っていく予定です。

甘肅省では、7月末に、隴南市成県で隴南地区、甘南州の地震災害地区を対象に麻疹、B型肝炎などの多くの感染症の予防をめざす拡大免疫の実務者セミナーを開催し、この地区の震災後の感染症の拡大を防ぐための方針、方策などを検討しました。交通手段が寸断され、地震の被害の大きかった山間部の甘南州から1日半から2日もかけて徒歩やバスなどで多数の参加者を得たことは、感染症の予防衛生に従事する関係者の地震復興に立ち向かう意気込みと熱意を感じるものでした。(長期専門家 藤井晃)

■ 円借款環境プロジェクト評価セミナーに参加

7月15日、16日の二日間、JBIC 主催の「円借款環境プロジェクト評価セミナー」が湖南省長沙市で行われ、JICA から環境分野および評価担当のナショナル・スタッフ 2

名が参加しました。

本セミナーの対象者は、円借款環境プロジェクト(上水事業、下水事業、大気汚染対策等)に従事する中国側関係者です。セミナーには全国から合計 150 名以上の参加者が集まりました。

二日間の会議は大きく分けて日本側の事後評価フレームワークに対する紹介と中国側による事後評価に対応するためのノウハウ紹介からなっています。まず、JICA 三竹専門家(円借款環境事業管理)及びJBIC 職員より事後評価制度、過去の事例等が紹介され、次に、貴州省貴陽市西郊浄水場建設事業と北京第9浄水場建設事業の代表者より、事後評価に係る経験等の紹介がありました。



全国の円借款環境プロジェクト関係者に
事業評価制度を説明する JICA 三竹専門家

円借款プロジェクトの事後評価はプロジェクト終了後の 2 年目に実施することになっています。事後評価指標は妥当性、有効性、効率性、インパクト、持続発展性という5つの評価項目からなり、JICA が用いている事後評価指標と同じです。評価メンバーは、現地の有識者、研究機関及び日本側の評価コンサルタントと大学の研究者等から構成され、日中共同で実施する形式となっています。評価結果は A、B、C、D の 4 ランクに分かれており、右評価結果は財政部と共有され、その他の円借款プロジェクトの実施運営に活かされています。

今回のセミナーを通じて、JBIC の評価

業務に対する理解が深まり、10月のJJ統合(JICA、JIBIC 統合)までに両機構の業務の相互理解を促進する良いチャンスだったと思います。今後、両機構の業務及び所員間の交流をさらに進めていきたいと思っています。

(業務班 張苑)

■ 「鳥の巣」で活躍している JDS 帰国留学生



訓練に励む「鳥の巣」医療チーム

今、北京ではまさにオリンピックが開催されており、世界の注目を浴びています。今回のオリンピック及びその後のパラリンピックにおいては、中日友好病院が選手・コーチ・マスコミ関係者の専門入院病院の一つとして選ばれ、オリンピックの医療業務を担っています。

約一年前に、中日友好病院を中心に13の関係機関からスタッフを選出し、「鳥の巣」医療チームが作られました。その時から、人材育成支援無償事業(JDS)第1期生の顔祥建さん(03年訪日、名古屋大学大学院医療行政専攻、修士号取得)は中日友好病院医務部副主任の他に、国家体育场医療サービス副經理という肩書きも持つようになりました。「鳥の巣」は、オリンピック及びパラリンピックの開・閉幕式をはじめ、多くの競技が行われる場所です。顔さんによると、この国家体育场医療サービス副經理という肩書きは大変光栄でありながらも、大きなプレッシャーをも感じているということです。彼は今、毎日が緊張の連続ですが、大きな大会を支える縁の下の力持ちとして、その調整能力が大いに

期待されています。彼にとってのこの一世一代の大役は日本での留学成果が大いに活かせる機会であると、私たちも非常に期待し、影ながら応援したいと思います。

頑張れ、顔さん！加油！顔さん！

(相互理解班 周妍)

■ 2008年10月のJICA-JBIC統合に向けて

「2008年」は歴史に残る一年になることでしょう。

東シナ海ガス田問題妥結、洞爺湖サミット、北京五輪・・・全て後世に語継がれる出来事ばかりです。他方、私達にとっての最大の出来事は、やはり2008年10月に予定されている新JICA誕生でしょう。現JICAと現JBICのODA部門が統合して誕生することになる『新JICA』では、技術協力、有償資金協力(円借款等)、無償資金協力という3つの援助メニューを一元的に取り扱うことになり、世界有数の総合的な援助機関となります。私達が果たすべき責務は更に大きくなることでしょう。



徹夜での引越しになりました

世紀の大イベントである北京オリンピック開催が近づく7月19日(金)、国際協力銀行

北京駐在員事務所のODA部門は、国貿ビルから発展大廈ビルへの引越業務を開始しました。

1999年10月1日に誕生した国際協力銀行(JBIC)北京駐在員事務所(国貿ビル)の最後の業務日。感慨に耽る暇もなく、机の引出から出てくる不審物(前任者の歯ブラシ等)をゴミ箱に入れつつ引越作業は進んでいきました。7月20日(土)午前7時、夜通し実施された引越作業が終了しました。



受付も明るくリニューアル

北京市内の至る箇所で目にする北京五輪のテーマ『一つの世界、一つの夢(同一个世界, 同一个梦想)』。私達、新JICAも同じく、一つの共通な夢に向かって、一つの組織として邁進していくことが必要だと思っています。

新JICAはどのような組織になるのでしょうか？世界にどんなインパクトを与えることができるのでしょうか？その解は私達職員一人一人のこれからの行動に懸かっていると思います。今後が非常に楽しみです。

(国際協力銀行 北京駐在員事務所 竹内和夫)

人の動き ・ 主要行事

(1) 主な調査団(派遣中・派遣予定)(8月)

- ・ 首都風砂被害地域における森林植生
物復旧及びモデル林造成調査団
(5/15~8/9)

- ・ 中西部地区リハビリテーション人材養成
プロジェクト運営指導調査(8/11-8/24)

(2) 8月の主要行事

なし

寄稿 コーナー

オリンピック期間中の北京に滞在して

今、世界から最も注目され、最もダイナミックな変化を見せているといっても過言でない北京にオリンピック開催期間を含め、1カ月ほど身を置く機会に恵まれた。その中で最も印象に残ったことを二つ挙げたい。



「鳥の巣」の前の筆者

一つは、街を歩く人々の様子についてである。「せかせかした感じがなく、ゆっくり堂々と歩いているなあ」というものだった。とくに道路を渡る際には急がずに、誰もが前後左右の状況を冷静に把握した上で、巧みに車をすり抜けるように横断していた。

車は右側通行、赤信号で右折OKなため、歩行者にとって信号が青でも左側からやって来る車を優先させるケースが多い。そして横断歩道の半ばあたりで対向車が右折してくれば、車のスピードや車との距離を瞬時に捉え、そのまま歩き続ける場合もあれば、立ち止まって車をやり過ごす場合もある。しかし急がず慌てない。あくまでも自然体なのである。まるで北京市民は誰もがこうした巧みな「技(わざ)」を自然に身に付けているかのようだった。車は止まってくれるという歩行者優先の日本での感覚をそのまま持ち込んで、時にヒヤリとさせられた。北京市街で道路を渡るという行為がこれほど難しいとは思わなかった。



ボランティアの活躍に感心しました

もう一つは北京オリンピック開催との関連で、街中の至る所でユニフォーム姿のボランティアが目立ったことである。大学生などの若者が多かったようであるが、「志願者」という腕章を付けた高齢の方々もがんばっていた。大きなホテル・ビルの出入り口、駐車場付近、バス停、地下鉄の改札口・ホームなどでよく見かけた。ボランティア・ブースを設けているところも随所に見られた。新設の地下鉄駅で交通 IC カードにチャージしようとした際、窓口の職員との英語でのやり取りがうまくいかず、職員が救いを求めるようにボランティアの学生を呼んで、その学生が英語を中国語へ通訳してくれ、希望した額のチャージを行うことができた。また、地下鉄からバスへの乗り換え、観光施設の開館について高校生風のボランティアが英語で一生懸命説明してくれた。滞在中、何かあった時にはいつでも助けてくれると思わせる安心感をボランティアは与えて続けてくれた。

ボランティア行為はユニフォームを着た人たちだけではなかった。タクシーに乗車中、急な予定変更で最寄りの地下鉄駅で下車した際、それまで余裕の表情だった運転手は、突如必死に英語での会話に応じてくれた。地下鉄の車内で私が持っていた重いバックを膝の上に置くよう促してくれた年配者、そして



独立行政法人 国際協力機構
中華人民共和国事務所

北京市朝陽区東三環北路5号 北京發展大廈400室 郵便番号:100004
TEL: +86-10-6590-9250 FAX: +86-10-6590-9260

小さな子どもや高齢者に席を譲る若者の姿も見られた。残念ながら、こうした草の根ボランティア活動が、徹底したテロ対策のセキュリティチェックによって減じられてしまったことは否定できない事実であろう。しかし同時に、オリンピックはボトムアップ型の献身的行為が北京の人々の多くに浸透する重要な契機になったのではないだろうか。

(宇都宮大学国際学部教授 中村祐司)

(編集部注)

中村教授はオリンピック研究・スポーツ行政学の第一人者ですが、今回は特別に事務所ニュースに寄稿して下さいました。

=====
* 皆様からの情報提供、大歓迎です。また、本紙に対するご意見、ご提案などもいただければ幸いです。いずれも中国事務所沈 曉静 (shenxiaojing.cn@jica.go.jp) へてお願いいたします。
=====

* その他お知らせ

JICAのホームページ: チマイナ ライブラリー (和文・中文)

> <http://www.jica.go.jp/china/library/news/index.html>

> <http://www.jica.go.jp/china/chinese/library/01.html>

チマイナ トピックス (和文・中文)

> <http://www.jica.go.jp/china/topics/index.html>

> <http://www.jica.go.jp/china/chinese/topics/index.html>